



TITLE:

京大広報 No. 600

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 600. 京大広報 2005, 600: 1883-1900

ISSUE DATE:

2005-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196497>

RIGHT:



京大広報

No. 600

2005. 4

目次

『京大広報』第600号発行にあたって 総長 尾池和夫……1884	
〈大学の動き〉	
副学長、機構長の任命……1885	
部局長の交替等……1885	
「宇治地区総合研究実験棟」竣工記念式典を举行 ……1888	
〈部局の動き〉	
生存圏研究所がインドネシア科学院生物材料 研究センターにサテライトオフィスを開設……1889	
経済学研究科に2つの寄附講座を設置……1890	
〈寸言〉	
大学よ 永遠なれ—自覚と実践の時— 山内潤三……1891	
〈随想〉	
The Lucky Dragon was unlucky? 名誉教授 前田 豊……1892	
〈洛書〉	
「京大広報」について 成生達彦……1893	
〈栄誉〉	
長尾 真前総長がフランス共和国レジオン・ ドヌール勲章シュバリエを受章……1894	

〈話題〉	
京大病院で「きさらぎコンサート」を開催……1894	
京都大学未来フォーラム（第11回）を開催……1895	
21世紀COEプログラム「先端経済分析のイン ターフェイス拠点の形成」公開シンポジウム 「京都議定書発効後の日本の課題」を開催……1895	
教育学研究科が国際シンポジウム「ものづくりの 美・ひとづくりの美—教育の未来を求めて」を 開催……1896	
経済研究所が「応用金融工学（野村証券グループ） 寄附研究部門」金融工学シンポジウムを開催 ……1897	
経済研究所が経済教育シンポジウム「学生と先生 のための経済・金融入門ゼミナール」を開催 ……1897	
〈訃報〉……1898	
〈日誌〉……1899	
〈公開講座〉	
法学研究科21世紀COEプログラム連続市民公開講座 ……1899	
〈お知らせ〉	
総合博物館春季企画展—考古学を愉しむ!?—……1900	
〈編集後記〉……1900	



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

『京大広報』第600号発行にあたって

総 長 尾 池 和 夫

京都大学では、『京都帝国大学一覧』が、1897年（明治30年）から1942年の期間、『京都大学一覧』が1953年から1972年までの期間、刊行されました。

『京大広報』第1号は、1969年（昭和44年）5月20日に発行され、号外を除いて、このたび第600号が発行されることになりました。途中、名誉教授に書いていただく「随想」、現任教員による「洛書」などの連載が始まり、第501号からは、現在と同じA4版カラーで、8月を除いて毎月発行の11冊と、卒業式や入学式の特集号を発行する形になりました。京大広報編集専門部会委員の執筆による「編集後記」も登場し、今発行部数は11,000部、印刷のほかにも、PDFでウェブに掲載し、たくさんの方に読んでいただいています。

京大広報第1号以来、私自身もその読者ですが、1997年11月の「創立百周年記念特集」や「京都大学百年史」は記憶に残る号外であり、また、2002年12月の第574号別冊「民族学校出身者の京都大学への受験資格に関する最終報告について」や、2003年8月の、長尾 真前総長による「京都大学の法人化についての総長所感」も、記憶に新しい号外です。

第571号からは卒業生にお願いして「寸言」が登場し、第600号までに30名の方々に書いていただきました。第600号を発行するにあたって、2002年9月に発行された第571号を読み返してみたいへん驚きました。「寸言」の最初は大西正文さんで、「志力検査」という題でした。その中で、大西さんは、社会に開かれた大学としての役割を果たしていくにあたって、「これからの時代の京都大学はいかにあるべきか。そのために、変えるべきものは何か、変えてはならないものは何か」について、高い志を持って常に問い続けることが不可欠だと述べておられます。そして、「京都大学は変わったなあ」と言われるようになって欲しいものである、と結ばれているのです。

法人化してほぼ1年がすぎました。法人化にあたって私がずっと思ってきたことは、京都大学の変えてはいけない面、変えなければいけない面、変わる面、変わらない面、それぞれをいつも忘れないようにということでした。これは、もしかしたらこの最初の「寸言」を読んで、この大先輩のことが私の脳に強く残されていたからかもしれないと、読み返してあらためて気づいて驚いたのです。

ついでながら、この第571号には、情報ネットワークのセキュリティ管理のことが載っています。今年4月1日に京都大学情報環境機構が新設されました。上海の復旦大学との学術交流も載っていますが、今では京都大学の上海センターが復旦大学にできています。

第600号の発行にあたって、京大広報の分厚いファイルをめくってみましたが、大学としての使命を意識しながら、京都大学が一步步確実に前進してきた様子を読みとることができたと思い、たいへんうれしく思いました。

歴代の広報委員の方々、広報課職員の方々、原稿を書いていただいた方々、熱心に読んで応援していただいている方々に心から感謝し、皆様に親しまれる京大広報であり続けることを願って、今後とも皆様のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

大学の動き

副学長，機構長の任命

4月1日，国際イノベーション機構，国際交流推進機構，環境安全保健機構，情報環境機構，図書館機構の5機構が新設されたことに伴い，それぞれ機構長が任命された。このうち2名については，副学長を兼ねる。

副学長・国際イノベーション機構長

松重和美工学研究科教授（電子工学専攻電子物性工学講座担当（分子ナノエレクトロニクス・ナノテクノロジー・強誘電体物性）が副学長，国際イノベーション機構長に4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



副学長・国際交流推進機構長

横山俊夫地球環境学堂教授（地域益学廊地球文明論分野担当（日欧文化交渉史，日本文明史）が副学長，国際交流推進機構長に4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



環境安全保健機構長

大寫幸一郎工学研究科教授（材料化学専攻有機材料化学講座担当（有機合成化学）が環境安全保健機構長に4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



情報環境機構長

松山隆司情報学研究科教授（知能情報学専攻知能メディア講座担当（知能情報学）が情報環境機構長に4月1日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。



図書館機構長

大西有三工学研究科教授（都市環境工学専攻ジオフロント環境工学講座担当（岩盤工学）が図書館機構長に4月1日付けで任命された。任期は平成20年3月31日まで。



部局長の交替等 （新任）

附属図書館長

大西有三工学研究科教授（都市環境工学専攻ジオフロント環境工学講座担当（岩盤工学）が，佐々木丞平附属図書館長の後任として，4月1日付けで任命された。任期は平成20年3月31日まで。



教育学研究科長・教育学部長

川崎良孝教育学研究科教授（教育科学専攻生涯教育学講座担当（図書館情報学）が，藤原勝紀教育学研究科長の後任として，4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



法学研究科長・法学部長

森本 滋法学研究科教授（企業関係法講座担当（商法））が、吉岡一男法学研究科長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。

**理学研究科長・理学部長**

北村雅夫理学研究科教授（地球惑星科学専攻地球物質科学講座担当（鉱物学））が、笹尾 登理学研究科長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。

**医学部附属病院長**

内山 卓医学研究科教授（内科系専攻内科学講座担当（血液学，腫瘍学，免疫学，ウイルス学））が、田中紘一医学部附属病院長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成20年3月31日まで。

**農学研究科長・農学部長**

矢澤 進農学研究科教授（農学専攻園芸科学講座担当（園芸学））が、高橋 強農学研究科長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。

**エネルギー科学研究科長**

吉川榮和エネルギー科学研究科教授（エネルギー社会・環境科学専攻エネルギー社会環境科学講座担当（エネルギー情報学））が、笠原三紀夫エネルギー科学研究科長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。

**生命科学研究科長**

西田栄介生命科学研究科教授（統合生命科学専攻多細胞体構築学講座担当（分子細胞生物学））が、稲葉カヨ生命科学研究科長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。

**地球環境学堂長・地球環境学舎長**

嘉門雅史地球環境学堂教授（地球親和技術学廊担当（環境地盤工学））が、中原紘之地球環境学堂長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。

**化学研究所長**

江崎信芳化学研究所教授（環境物質化学研究系（分子微生物科学研究領域）担当（応用微生物学））が、高野幹夫化学研究所長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



人文科学研究所長

金 文京人文科学研究所教授（文化構成研究部門担当（中国文学））が、森 時彦人文科学研究所長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



防災研究所長

河田恵昭防災研究所附属巨大災害研究センター教授（附属巨大災害研究センター巨大災害過程研究領域担当（防災システム））が、井上和也防災研究所長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



生態学研究センター長

大串隆之生態学研究センター教授（生態学研究部門担当（陸域相互作用生態学））が、清水勇生態学研究センター長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



環境保全センター長

大冨幸一郎工学研究科教授（材料化学専攻有機材料化学講座担当（有機合成化学））が、高月 紘環境保全センター長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



国際交流センター長

田村 武工学研究科教授（社会基盤工学専攻応用力学講座担当（社会基盤工学，応用力学））が、4月1日付けで初代国際交流センター長に任命された。任期は平成19年3月31日まで。



総合博物館長

中坊徹次総合博物館教授（資料開発系担当（魚類学））が、山中一郎総合博物館長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成19年3月31日まで。



国際融合創造センター長

牧野圭祐国際融合創造センター教授（創造部門バイオテクノロジー分野担当（バイオテクノロジー））が、松重和美国国際融合創造センター長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。



(再任)

文学研究科長・文学部長

藤井譲治文学研究科教授(歴史文化学専攻日本史学講座担当(日本近世・近代史))が、4月1日付けで文学研究科長・文学部長に再任された。任期は平成18年3月31日まで。

基礎物理学研究所長

九後太一基礎物理学研究所教授(極限構造研究部門担当(素粒子論))が、4月1日付けで基礎物理学研究所長に再任された。任期は平成19年3月31日まで。

原子炉実験所長

代谷誠司原子炉実験所教授(原子力基礎工学研究部門担当(原子炉物理学))が、4月1日付けで原子炉実験所長に再任された。任期は平成19年3月31日まで。

放射線生物研究センター長

小松賢志放射線生物研究センター教授(ゲノム動態研究部門担当(放射線分子生物学))が、4月1日付けで放射線生物研究センター長に再任された。任期は平成19年3月31日まで。

フィールド科学教育研究センター長

田中 克フィールド科学教育研究センター教授(里域生態系部門河口域生態学分野担当(海洋生物資源学))が、4月1日付けでフィールド科学教育研究センター長に再任された。任期は平成19年3月31日まで。

カウンセリングセンター長

岡田康伸教育学研究科教授(臨床教育学専攻心理臨床学講座(人格心理学、心理療法・箱庭療法))が、4月1日付けでカウンセリングセンター長に再任された。任期は平成19年3月31日まで。

再生医科学研究所長

中辻憲夫再生医科学研究所教授(再生統御学研究部門担当(発生生物学))が、4月1日付けで再生医科学研究所長に再任された。任期は平成19年3月31日まで。

数理解析研究所長

高橋陽一郎数理解析研究所教授(無限解析研究部門担当(確率解析、力学系の研究))が、4月1日付けで数理解析研究所長に再任された。任期は平成19年3月31日まで。

霊長類研究所長

茂原信生霊長類研究所教授(進化系統研究部門担当(自然人類学))が、4月1日付けで霊長類研究所長に再任された。任期は平成18年3月31日まで。

放射性同位元素総合センター長

五十棲泰人放射性同位元素総合センター教授(放射線物理学担当(原子・原子核物理学、放射線計測学))が、4月1日付けで放射性同位元素総合センター長に再任された。任期は平成18年3月31日まで。

保健管理センター長

川村 孝保健管理センター教授(内科学・疫学)が、4月1日付けで保健管理センター長に再任された。任期は平成19年3月31日まで。

「宇治地区総合研究実験棟」竣工記念式典を挙行

宇治キャンパスでは、宇治地区総合研究実験棟の竣工記念式典が3月9日(水)に挙行された。記念式典には、来賓及び学内関係者等約100名が出席。宇治地区部局長会議世話部局の松本 紘生存圏研究所長、尾池和夫総長の挨拶に続き、萩原久和文部科学省文教施設企画部長の祝辞があった。続いて、金谷

史明施設・環境部長から工事経過の報告があり、松本所長からは工事関係者に感謝状が贈呈され、その後、建物内の施設案内が行われた。

宇治地区総合研究実験棟は、「緊急整備5ヶ年計画」の優先的な目標の一つである「卓越した研究拠点の整備」の一環として事業化されたもので、現在、

化学研究所, エネルギー理工学研究所, 生存圏研究所, 防災研究所, 国際融合創造センター及び工学部附属量子理工学研究実験センターの各部局の一部が

入居しており, 鉄筋コンクリート造り地上5階建て, 延面積11,198㎡として完成した。



挨拶する尾池総長



祝辞を述べる萩原文科省文教施設企画部長

部局の動き

生存圏研究所がインドネシア科学院生物材料研究センターにサテライトオフィスを開設

生存圏研究所は, 2月25日(金), インドネシア ボゴール市チビンongにあるインドネシア科学院生物材料研究センター内にサテライトオフィスを開設した。

これは, 1996年から同センターとの間で実施している日本学術振興会拠点大学交流事業で蓄積した, 研究成果, 人的資源, 国際共同研究体制をもとに, これらを一層発展させ, 人類生存圏の構築に必須の熱帯森林資源の持続的生産・利用に関する東南アジア域での広域的な国際共同研究を担う拠点とすることを目的に準備を進めてきたものである。サテライトオフィスは60㎡の広さで, 同事業の学術情報交換により整備してきたライブラリーや研究成果の展示を行うとともに, 日本人研究者の研究・実験室とし

て利用するなど国際学術交流の有機的な連携機能を備えている。今後は, インドネシア国内における熱帯森林資源の俯瞰的広域国際共同研究の拠点, ならびに日本国内からの出前講義や分析・解析・計測などの実習を実施する国際教育拠点, スマトラやカリマンタンで実施しているアカシアマンガウムの生産と利用に関する研究や, ジャワ及び周辺諸島で行なっているシロアリ行動生態などのフィールド研究のデータ集積・解析拠点として機能させる予定である。



記念スピーチをするインドネシア科学院長官
ウマル・アンガラ・ジェニー 教授

同研究の拠点, ならびに日本国内からの出前講義や分析・解析・計測などの実習を実施する国際教育拠点, スマトラやカリマンタンで実施しているアカシアマンガウムの生産と利用に関する研究や, ジャワ及び周辺諸島で行なっているシロアリ行動生態などのフィールド研究のデータ集積・解析拠点として機能させる予定である。

なお, 開設式典には, インドネシア科学院長官ウマル・アンガラ・ジェニー教授を迎え, 本事業日本側コーディネーター・本研究所 今村祐嗣教授, インドネシア側コーディネーター・インドネシア科学院生命科学部門 エンダン・スカラ部門長をはじめとし, 多数の関係者が参列する中, 盛大に開催された。

(生存圏研究所)



サテライトオフィス前での記念写真

経済学研究科に2つの寄附講座を設置

4月1日から、大学院経済学研究科に新たに2つの寄附講座が設置されることになった。今回設置されるのは、「企業金融（みずほ証券）講座」と「ベンチャーキャピタル経営論（UFJキャピタル）講座」で、その概要は以下のとおりである。

「企業金融（みずほ証券）講座」

- 1 部 局 名 大学院経済学研究科
- 2 名 称 企業金融（みずほ証券）講座
- 3 寄 附 者 みずほ証券株式会社
- 4 寄附金額 総額 1億2千万円（分割納付）
- 5 設置期間 平成17年4月1日～
平成20年3月31日
- 6 担当教員 教授相当 川北 英隆
助教授相当 砂川 伸幸
助教授相当 芝田 隆志
- 7 研究目的 企業金融とそれに関連する分野の高度な研究と、その実務への応用を促進すること。
- 8 研究内容 日本における企業金融の制度的、行動的特質を、経済学及び経営学の立場から理論的、体系的に考察し、その分析結果に基づいたより効率的な企業金融システムの具体的なモデル開発を目指す。
- 9 研究課題
 - ・日本の企業金融システムの制度的特質を、金融機関と産業企業との視覚から、国際比較のアプローチから考察する。
 - ・日本の企業金融の諸側面を、効率性の観点から経済学的に分析して、具体的な問題点を明確化する。
 - ・新しい企業金融のシステム設計を、経営学的な手法によって開発して、効率的な企業金融モデルの設計を行う。

「ベンチャーキャピタル経営論（UFJキャピタル）講座」

- 1 部 局 名 大学院経済学研究科
- 2 名 称 ベンチャーキャピタル経営論（UFJキャピタル）講座
- 3 寄 附 者 株式会社UFJキャピタル
- 4 寄附金額 総額 4千万円（一括納付）
- 5 設置期間 平成17年4月1日～
平成19年3月31日
- 6 担当教員 教授相当 濱田 康行
助手相当 片川 真実
- 7 研究目的 ベンチャーキャピタル経営とそれに関連する分野の高度な研究、その実務への応用研究、及び関連業界で活躍できる人材の教育を促進すること。
- 8 研究内容 日本及び欧米におけるベンチャーキャピタルの行動的特質を経営学の立場から理論的かつ体系的に考察し、その分析結果に基づいて日本及びアジア諸国で応用可能なベンチャーキャピタル論を構築するとともに、それを応用したベンチャーキャピタルの効率的な経営システムを具体的に開発することを目指す。さらに、その研究成果を学部及び大学院での教育に反映させる。
- 9 研究課題
 - ・ベンチャーキャピタルの行動的特質の経営学的考察
 - ・ベンチャーキャピタルの国際比較
 - ・ベンチャーキャピタルの効率的な経営システムの開発

寸言

大学よ 永遠なれ—自覚と実践の時—

山内 潤三

このへ 九重に花ぞ匂へる 千年の京に在りて
 その土を朝踏みしめ その空を夕揚げば
 青雲は極みはるかに われらの眼を迎へ
 照る日は光直さし われらの言葉に映る
 (水梨彌久：作詞 下総皖一：作曲)

申すまでもなく、わが京都大学学歌〔1〕です。この学歌を口ずさむ時、目の前に千年の歴史と文化を誇る京の街々が浮かんできます。とともに、明治30年に創設された京都（帝国）大学の百余年に亘る自由と苦難の歩みをも偲ばずにはおれません。その上、この荘重な古典的五七調の作詞者水梨氏が、私と同じ文学部国語学国文学専攻の大先輩（昭和13年卒、同35年3月没）であることに云い知れぬ親愛感を覚えるのです。

さて私は関西諸大学の学科長や研究科長を歴任した後、NHK大阪・神戸文化センターなどで毎月14種類の文化講義や現地講座（史跡めぐり）を担当中です。昨年までは兵庫県スキー連盟会長（国体出場34回）、ライオンズクラブ国際連絡委員長もやりました。その他、現在、「大阪京大クラブ」の副会長、兼総務委員長をしています。故芦原義重前会長の次の館料（たちただす）新会長を輔佐しつつ、京大各学部・各大学院を卒業・修了した会員（約400名）のお世話をしている一人です。

この「大阪京大クラブ」は平成15年9月に創立50周年を迎えました。記念行事として「小史」を編むことになり、私が編集・執筆の責任者に決まりました。その時、私は考えました。「母胎である京都大学の創立・発展・変革から現状と未来像までを詳細に知らねばならない。そのためには京大百周年記念の数々の出版物を読破すべきだ」と。そして直ちに実行しました。『京大史記』・『京都大学の世紀』・『京都大学の精神』・『京都大学90年』・『京大広報(各号)』・『学生新聞』・『大学案内』等々を丸2ヶ月間、熱心に読みつけました。その結果、『大阪京大クラブ50周年記念小史』の「編集後記」に私は記しました。

「京都大学は日本はもとより、世界の歴史に残る優れた大学である。様々の苦難と試練を乗り越えて、学問の真理探究と大学のあるべき姿を模索し続けて百年、漸く今日の大を成し得たのである。そこには歴代総長の深い思索と強靱な指導力のもと、良きづ



志賀山文庫夏期大学にて
 「スキー部仲間」広中平祐氏（左）と
 （参考）注）左奥の人物は、
 日本スキー界の名士 杉山 進氏

レーンとも言うべき教官および熱心な事務職員の方々の力強い協力があった。更にその底辺には、豊かな良識を持った学生達の親和力が常に存在したことを忘れてはならない」と。

それから1年余りが経ちました。国立大学法人法による画期的な大変革が実現中の現在、私は次のように考えます。

「我々は京都大学に学び、研究し、意義ある学生生活を送った。やがて卒業し、色々の社会に出て、何とか一人前の人間として仕事をしてきた。今、人生の後半期にあって何を考え、何をすべきか」ということです。

「京大卒」だけを看板に掲げる閉鎖的エリート意識などは、むしろ有害というべきでしょう。他への深い思いやりと豊かな協調性に富む人こそ有用なのです。狭い同学・同窓の感覚ではなく、異なった環境への理解や異次元をも包含する共生への寛容さがなければ、近未来の人間社会は発展しないでしょう。いわば、視界の拡大と新しい認識の高次元化が、私たち個人は勿論、その集合体—つまり大学自体—にも必要不可欠になっています。それは国公立であれ私学であれ、すべての大学の緊急課題なのです。一日の怠慢も、一瞬の退歩も許されません。なぜなら、新しい大学の存在価値は、フンボルトの目指した如く、総合的發展とその継続にあるのですから。

この時に当たり、我々OB・OG一人一人が、自己の自覚を明確にせねばなりません。そしてその持てる力を母校のために尽くすべき時が今到来しつつあるのです。たとえそれが精神的または間接的であろうと、その総和の力は偉大だと思います。そのためには私たち自身、健康で、スポーツを楽しみ、社会奉仕や仕事に充実した毎日を送るのが大切なこと、云うまでもありません。

（やまのうち じゅんぞう 西北大学（中国）名誉教授、昭和27年文学部卒業）

随想

The Lucky Dragon was unlucky?

名誉教授 前田 豊

京都大学を停年退官のあと、私立外国語大学で共通教育科目として環境科学を担当している。その中で原子力についてやや詳しく講義している。過日、私の講義を聴いたという学生が研究室に現れて、米国の交換留学生達と原子力問題についてディベートすることになったので講義で習得した知識をさらに補強したいとのことであった。



そこで第二次大戦末期の広島・長崎における原子爆弾による被爆、その後の核兵器開発競争の時期に起こった第五福竜丸のビキニ水爆実験による被災を経て、「核兵器の不拡散に関する条約（NPT）」に至る経過、さらにはイラク・イラン・北朝鮮における核開発の問題について、一方、今や我が国の基幹電力となっている原子力の平和利用における問題、即ちチェルノブイリ、「もんじゅ」、JCOの事故、さらには燃料の再処理、放射性廃棄物処理の問題などについても、私は当の学生に解説をし、資料を渡した。これには現在、同じ大学に在職している池永名誉教授の知識と資料も動員され、万全の備えでその学生はディベートに臨んだのである。

10日ばかり経って、学生が報告と資料の返却のため研究室に現れた。ディベートで留学生達を一蹴して意気揚々と現れると思っていたが、なぜか学生は浮かぬ顔をしているのである。報告によると、留学生達は広島・長崎の被爆記録写真集を見て大きな衝撃を受けたとのことであるが、肝心のディベートでは‘lucky dragon’が頻繁に現れて、留学生達が何を言っているのか分からず、ディベートにならなかったというのである。この報告には、私も池永先生も状況がどのようなであったか直ちに理解できなかった。そこで、余りにも多用されたという‘lucky dragon’が気になったので、Yahoo! Searchしてみると、‘Lucky Dragon Incident’のタイトルで‘Japanese Radioactive Injured Fishermen Case’

や‘Unlucky fishing boat became a symbol of Japanese nuclear dread.’などが現れ、lucky dragon = ‘福竜丸’であることを知って、学生を始め、私達は愕然としたのであった。キーワードに nuclear testing・ship・Bikiniを加えて検索すると約500件のヒットがあり、これらは1954年3月1日の早朝、マーシャル群島のビキニ環礁の近くで行われた米国の水爆実験‘Bravo’によって放射能被害を受けた日本のマグロ漁船「第五福竜丸」に関するものである。因みに、Yahoo! Japanで福竜丸・核実験・船・ビキニをキーワードとして検索すると約250件のヒットがあり、日本においても世界においても第五福竜丸の事件は忘れ去られていないことを知り、わずかに救われた気持ちになったのである。

広島、長崎に続き我が国にとって3番目の核兵器被害をもたらしたビキニ事件はちょうど私が京都大学に入学したときに起こり、その後京都でも核実験による放射能雨が降り、原水爆禁止運動が高まった。私が専攻した応用物理学教室の四手井研究室でも雨の放射能測定が行われた。昨年には第五福竜丸被災50周年事業が行われたところである。今日、多くの人はNYの松井秀喜選手につけられたニックネーム‘ゴジラ’を知っていても、それが度重なる水爆実験によって太古の眠りから覚めた恐竜が水爆のエネルギーを全身に充満させた巨大怪獣ゴジラとなって人類に襲いかかるという‘核の恐怖’から生まれたものであることは知らないだろう。

核問題は21世紀になった今日においても目の離せない重大な問題であり、“The Lucky Dragon was unlucky.”で済ませることなく、核兵器を廃絶し、原子力の平和利用を健全な発展に導くためには、このたび‘lucky dragon’を体験した若者達は非常に頼もしい。原子力に限らず、地球持続のために多くの新しい世代に歴史を見通す知識と気力をもって現実に立ち向かって貰いたいと願っている。

（まえだ ゆたか 元原子炉実験所教授 平成11年退官 専門は放射線物性）

洛書

「京大広報」について

成生 達彦



昭和44年5月20日に7ページの第1号が発行されてから、足かけ41年、今回の「京大広報」が丁度600号になります。大学紛争の最中、「大学で起きていることを的確かつ迅速に知らせる」ことを目的として発刊されたようです。第2号が同月23日、第3号が30日というように、発刊当初は毎月3～4回発行されていました。昭和49年8月に第100号、同55年7月に第200号と進み、平成8年の第501号から、現在と同じ毎月1号（8月を除く）年11回の発行ペースになっています。この間、昭和52年の第132号から、名誉教授が執筆する「随想」の連載が始まりました。「随想」を書くことができるのは1年に11名だけですから、900名を超える名誉教授がおられる現在、全員に書いていただくことは不可能です。名誉教授の方で執筆を希望される先生は総務部広報課へ是非ご寄稿ください。また、現役教員が執筆する「洛書」は平成3年の第402号から、卒業生が執筆する「寸言」は平成14年の第571号から連載が始まっています。

私が広報委員になったのは2年前です。広報委員会には「京大広報」、「紅萌」、「楽友」、「ホームページ」という4つの専門部会があり、同僚からは「「京大広報」専門部会は毎月会議があるから避けた方がよい」といわれていました。それなのに、どういふわけか、この専門部会の部会長をやることになってしまいました。

この専門部会では、事務本部や各部局から寄せられた原稿の中から適切な記事を選び、それらを読み合わせながら、誤字・当て字・差別用語を訂正していきます。また、長くて分かり難い文章を修正することもあります。この作業には2時間程度かかりますし、一部の原稿は広報委員が持ち帰って点検します。10名近い教員が毎月長い時間拘束されるというのは無駄ですので、この作業は外部のプロに委託するということを考える必要があると思います。

この仕事もこの号でおしまい。と思っていたら、「洛書」を書けとのことで、この文章を（これが本

当に最後だと期待しつつ）書いています。

ここからが本題ですが、「京大広報」の役割について述べてみようと思います。その前に、大学の広報活動はどうあるべきかを考えなければなりません。確かに、私学とは異なり、受験広報にそう力を入れる必要はないでしょうし、研究成果についても学術誌に発表すればよいのかもしれませんが、また、注目される研究は新聞などでも取り上げてくれます。とはいえ、国立大学法人となった現在、他大学との差別化という観点からも、教育・研究をはじめとするさまざまな活動内容を（わかりやすく）外部に知らせることの重要性は増していくでしょう。この際、どの情報をどのメディアを用いて提供するかを整理する必要があると思います。

「京大広報」についていえば、一昔前とは異なり、京都大学のホームページも充実してきており、速報性という観点からは「京大広報」は明らかに劣ります。しかしながら、ホームページはしばしば更新されるため、過去の情報を常に入手できるとはかぎりません。このようなわけで、記録性という観点からは、紙媒体の方は優れていると思います。「学報」が廃止された現在、「京大広報」は速報性よりも記録として残すべき記事を中心に編集するのが適切と考えます。また、創刊当初の意図を踏まえれば、国立大学法人となった現在、大学運営の意思決定機関である「経営協議会」でどんなことが話し合われているかを教職員に知らせる必要もあると思います。

さらにいえば、現状では発行したらそれでおしまいです。読者からの意見を聞くようなシステムを工夫する必要があるかも知れません。この読者には、もちろん学生も含まれますし、事情が許せば卒業生を含めてもよいのではないのでしょうか（「京大広報」の配布が同窓会の充実に役立つかも知れません）。

いろいろ述べてきましたが、この種の改革は「言うは易し、行なうは難し」なのかも知れません。それでも、この「京大広報」が一層充実し、京大内外の円滑なコミュニケーションに一役果たすことを、一読者として祈念しております。

総務部広報課の連絡先：

TEL：075-753-2071 FAX：075-753-2094

E-Mail：kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

（なりう たつひこ 大学院経済学研究科 教授）

栄誉

長尾 真前総長がフランス共和国レジオン・ドヌール勲章シュバリエを受章

長尾 真前総長がフランス政府からレジオン・ドヌール勲章シュバリエに叙され、1月27日（木）にフランス大使館公邸（東京・港区）で、ベルナール・ド・モンフェラン駐日フランス大使臨席のもと、叙勲式が執り行われた。レジオン・ドヌール勲章はナポレオン・ボナパルトによって1802年に創設されたものであり、経済、文化交流の発展への功労者等に与えられる最高の栄誉をしめす由緒ある勲章である。



先生は、昭和34年京都大学工学部電子工学科を卒業、同36年に同大学大学院工学研究科修士課程を修了後、京都大学工学部助手、講師、助教授を経て、同48年教授に就任し、有線通信工学講座を担当された。その後、平成8年大学院工学研究科に配置換えとなり、通信情報工学講座を担当された。昭和61年より平成2年まで大型計算機センター長、平成4年より同6年まで評議員、同7年より同9年まで附属図書館長、同8年より同9年まで総長特別補佐、同

9年より工学研究科長・工学部長など学内の要職を歴任された後、平成9年12月第23代京都大学総長に就任され、6年間総長として大学の管理・運営に尽力された。平成15年12月任期満了により退官され、名誉教授の称号を受けられた。退官後は平成16年4月独立行政法人情報通信研究機構初代理事長に就任され、現在に至っている。

先生は、画像や言語という情報メディアを用いた知的な情報処理に関する研究に力を注ぎ、パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳、電子図書館の分野において優れた研究成果を上げられ、数々の栄誉を受けてこられた。

このたびの受章は、先生が昭和44年9月より同45年10月までフランス・グルノーブル大学客員助教授を務め日仏の学術発展に寄与されたことや、国立大学協会会長として日仏大学コンソーシアム、日仏共同博士課程、日仏研究者交流（SAKURA）プログラムの設立など、日仏間の研究交流の基礎づくりをされたことに対する多大な貢献が評価されたものである。

話題

京大病院で「きさらぎコンサート」を開催

京大病院では、2月22日（火）夕方、外来棟1階のアトリウムホールに特設ステージを設け「きさらぎコンサート」を開催した。

三嶋理見患者サービス推進委員長の挨拶に始まり、朗読とピアノによって人に安らぎとパワーと生きる力を与えるため各施設を廻っておられる中川智子さんによる朗読（ピアノ伴奏：五味淵淑子さん）とチャリティーコンサートなどで幅広い演奏活動されている西田未知留さんによる歌（ソプラノ）（ピアノ伴奏：小林美智さん）で実施した。

当日は、吹き抜けのアトリウムホール2階の立ち見も含め、入院患者さん、当日来院の外来患者さん約150名から盛んな拍手が送られていた。

このコンサートは、入院患者さんへ“憩いのひととき”を提供するため、平成7年から毎年、事務部・看護部による実行委員会が企画している手作りのイベントで、京大病院の恒例行事となっている。

（医学部附属病院）



京都大学未来フォーラム（第11回）を開催

京都大学では、恒例となった様々な分野で活躍する本学卒業生「OB・OG」を迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムの第11回目を、2月23日（水）の夕刻に時計台記念館百周年記念ホールにおいて開催した。

今回は、文学部を卒業され、現在は華嚴宗管長・東大寺別当として活躍されている森本公誠氏を講師に招き、文学研究科の杉山正明教授の司会で、「仏教僧がイスラムを学ぶー地球未来に仏教思想は生かせるか」と題して講演が行われた。

講演では、仏教の世界に身を置きつつイスラム教を研究対象としたのは、世界の三大宗教の一つであるイスラム教の持っているエネルギーを自分の目で確かめたいという興味から始まったこと。イスラム教は政治・宗教の側面だけではなく、歴史的視野を持った文明・文化の総体としてイスラムを科学することが必要であり、どのような筋道をたどってイスラムを理解し、さらには仏教のもつ未来的な意義を探るかという点について語られた。

また、21世紀を文明の衝突の世紀としないために

は、一人一人が自らの規範を律し、争いを乗り越えて行動することが望まれていること、人類の安寧という目的を持った哲学を確立するためにも仏教思想は資することができること。さらに人格を持たない科学には、常に慈しみの目をもったお釈迦様のような目でもって検証することが必要であり、科学は何でも進歩すれば良いものではないことが強調された。

参加した約180名はメモを取りながら真剣に聞き入り、講演終了後、参加者からは日本におけるイスラム教徒との関わり方などへの質問があり、有意義なフォーラムとなった。



21世紀COEプログラム「先端経済分析のインターフェイス拠点の形成」公開シンポジウム「京都議定書発効後の日本の課題」を開催

経済研究所・大学院経済学研究科21世紀COEプログラム「先端経済分析のインターフェイス拠点の形成」では、3月5日（土）に、東京の一橋記念講堂にて、公開シンポジウム「京都議定書発効後の日本の課題」を開催した。

今回の公開シンポジウムでは、先ず、拠点リーダーの佐和隆光経済研究所長が「京都議定書の発効とこれからの温暖化対策」と題する基調講演を行った。そこでは、京都議定書に定められた日本の目標水準は、国内対策とクリーン開発メカニズムや排出権取引に代表される京都メカニズムを活用することにより、達成可能な範囲にあると考えられることが強調された。

次いで、この基調講演に基づき、植田和弘経済研究科教授の司会の下、赤阪清隆OECD事務次長、



小林 光環境省環境管理局長、佐和経済研究所長、松本泰子地球環境学堂助教授によるパネル・ディスカッションが行われた。赤阪OECD事務次長は、交渉の当事者として、京都議定書の策定・合意プロセスについて振り返り、小林環境管理局長は京都議定書の発効を受けて、日本の地球温暖化政策はどの

ようなものであるべきかについて発言した。また、松本助教授はN G Oに参加した経験に基づいて京都議定書に対する評価を述べた。全体として、京都議定書に定められた目標を達成するために、日本のリーダーシップが期待されていること、発展途上国の参加が不可欠であることの合意が得られた。

本シンポジウムには600人を越える参加者があり、成功裡に終えることができた。

(経済研究所・大学院経済学研究科)



教育学研究科が国際シンポジウム

「ものづくりの美・ひとづくりの美——教育の未来を求めて」を開催

3月6日(日),7日(月)の両日,京都市中京区の京都新聞文化ホールで,京都大学大学院教育学研究科と国際交流基金京都支部,そして京都新聞社の共催で,国際シンポジウム「ものづくりの美・ひとづくりの美—教育の未来を求めて」が開かれた。本シンポジウムは,専門家の実践的判断力ともいえる「専門的教養知」の働きと養成についてこれまで総長裁量経費を得て京都大学教育学研究科が行ってきた共同研究を受けて,伝統的学びの様態を芸術活動に焦点を当て日独比較の観点から議論することを目的として開催された。日本側からは,本学の本間政雄理事,東山紘久理事,藤原勝紀教育学研究科長をはじめ研究科のスタッフが,またドイツ側からはベルリン自由大学歴史人間学研究所のCh. ヴルフ氏をはじめ3名の研究者が参加した。

ものをつくるという営みにおいて,その制作対象と向き合い,制作や創作に伴う苦楽の体験を蓄積することを通して,人はいかにして己自身と向き合っているのだろうか。ものづくりを通して,人はものを作る己自身を磨いているのではないだろうか。このような身体を介した修行や修養といった伝統的な学びの形態は古今東西を問わず共通している。だが,近代以降の知識偏重主義の流れのなかで,身体を介したそうした学びの形態は衰退の一途をたどっている。今回のシンポジウムでは,実際にそうした伝統的な学びの形態を踏襲しつつも,新たな文化を創成しようと京都からの発信を続けている方々から,陶芸家の樂吉左衛門氏や能楽師の片山清司氏を招き,自らの修行を通じた気付きや自己養いの様態などに



についてビデオや体験談を通して語っていただいた。

ダンスや芸能など身体を使った表現活動において,その表現の技法を人はいかにして学ぶのか,陶芸などものづくりの過程で,人はいかにして師匠の芸を乗り越えようとして自らの独自性を打ち出していくのか,あるいはまた,師匠は弟子に技をどう伝えるのか,という点について日独の研究者の間で議論がなされた。とりわけ,師匠は全てを網羅的に知識として示すのではなく,敢えて教えないという部分を意識的につくることを通して,弟子自らが想像力を駆使して技を磨き,自分の流儀を見出していくという日本の伝統的な伝承・伝達の技法に対して,ドイツ側からは,新たな学びの様態として多大な関心が示された。

一般からはおよそ110名の参加を得,また美学や教育学,認知心理学などこの主題に関心をもつ内外の研究者も30数名参加し,盛況のうちに熱のこもった議論が展開された。

(大学院教育学研究科)

経済研究所が「応用金融工学（野村証券グループ）寄附研究部門」金融工学シンポジウムを開催

経済研究所では、3月11日(金)に東京の一橋記念講堂において、金融工学の知識を必要としない企業関係者や投資家などの実務者向けに、平成13年10月「高度な金融工学の研究とその実務への応用の促進」を目的に創設された「応用金融工学（野村証券グループ）寄附研究部門」によるシンポジウムを開催した。

午前の部では、『金融工学の新展開2005』をテーマに刈屋武昭客員教授の挨拶のあと、UCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)アンダーソンスクール教授 リチャード・ロール氏による「Liquidity and Arbitrage」、関根 順客員助教授による「長期間最適投資ポートフォリオの計算について」、原 千秋助教授による「個人のリスク許容度と経済全体のリスク許容度」、野村証券金融経済研究所金融工学研究センター主任研究員 内山朋規氏による「金融工学最前線－米国学会参加報告－」と題した講演が行われた。

また、午後の部では、氏家純一野村ホールディングス株式会社取締役会長のご挨拶のあと、リチャード・ロール氏による特別講演「Why Many Developing Countries Just Aren't?」が行われ、佐和隆光経済研究所長／附属金融工学研究センター長による「二酸化

炭素排出権取引はどうか」、刈屋客員教授による「ERM-IM価値創造経営－エンタープライズ・リスクマネジメント(ERM)と無形資産(IA)－」の基調講演が行われた後、引き続き『企業価値創造とリスクの市場化－知的社会の企業経営－』をテーマにパネルディスカッションが行われた。

会場には、企業関係者や投資家をはじめ経済界等から約300名の参加者が熱心に講演及びパネルディスカッションに聞き入っていた。

なお、同寄附研究部門では、日本の資本経済の活性化に微力ながらも貢献しようと、今後もこのようなシンポジウムを開催していく予定である。

(経済研究所)



経済研究所が経済教育シンポジウム「学生と先生のための経済・金融入門ゼミナール」を開催

経済研究所では、3月12日(土)に東京の日経ホールにおいて学生、教育関係者ならびに一般を対象に、経済・金融に関する基礎的な理解の向上に役立ててもらふほか、経済・金融教育の重要性について認識を深めてもらうための教育シンポジウムを開催した。

シンポジウムは、佐和隆光経済研究所長の挨拶のあと、新浪剛史株式会社ローソン代表取締役社長による基調講演「人生は投資の連続だ!」が行われ、刈屋武昭客員教授による「企業の社会的役割を理解してよい企業を育てよう」、加藤康之客員教授による「資産運用の知恵を学ぶ」と題した講演(経済・金融入門ゼミナール)が行われた。

同シンポジウムには、参加申込が殺到し、参加者は熱心に講演に聞き入っていた。また、講演は分か

りやすくユーモアも交え、会場からは時折笑いもあり大盛況のうちに終了した。

(経済研究所)



訃報

このたび、増田 稔^{ますだ のり} 名誉教授、竹中 修^{たけなか おさむ} 教授、廣海 啓太郎^{ひろみ けいたろう} 名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

増田 稔 農学研究科教授



増田 稔先生は、2月27日逝去された。享年61。

先生は、昭和41年京都大学農学部林学科を卒業後、同年同大学木材研究所助手に採用された。昭和55年より三重大学農学部の助教授として赴任され、同60年に京都大学農学部林産工学教室助教授に着任、平成7年には教授に就任された。以後、森林科学専攻長、森林科学科長など、農学部および農学研究科における数々の要職に持ち前の穏やかさと整然とした論理でもって臨まれた。また、関連学

協会等の役職も積極的にこなし、木材研究の進展に貢献された。

先生の専門は木材工学で、特に生物材料である木材の力学に関する第一人者として活躍されており、「木質構造」などの著書がある。また、三重大学時代に木目模様の研究を本格的に始められ、我々が木目に魅せられる理由の根源を明らかにしようとされていた。京都大学農学部においては、「木材の力学」と「木目模様の印象」という一見相反する二つの研究テーマを精力的に追究されるとともに、これらの研究の面白さと奥深さを学生たちに熱心に指導されていた。
(大学院農学研究科)

竹中 修 霊長類研究所教授



竹中 修先生は、3月3日逝去された。享年63。

先生は、昭和40年東京工業大学理工学部化学科卒業、同45年同大学大学院理工学研究科化学科専攻博士課程修了（理学博士取得）後、同45年4月から同46年3月まで日本学術振興会奨励研究員として勤務、同46年4月東京工業大学理学部助手に任ぜられた。そののち昭和49年京都大学霊長類研究所助教授を経て、同59年に同教授に就任された。

先生は、霊長類の分子生物学を中心に、ニホンザルの父子判定を手始めとして、生態学との連携によ

る学際的な研究分野で常に先駆的な役割を果たしてこられた。また、インドネシアを基盤とした海外調査プロジェクトを組織し、アジアの霊長類とくにマカク類の研究をとおして霊長類の進化的考察を深められた。さらに、英文学術雑誌「PRIMATES」の編集委員や国際霊長類学会事務局長を務めるなど、霊長類学に関する論文、教科書の執筆や編集に携るほか、研究集会やセミナーを計画しアジアを中心とした若手研究者の育成にも尽力され、霊長類学の発展に大きく寄与された。若手研究者との会話を大事にされ、人の輪を大切にする人として人々に親しまれる存在であった。

(霊長類研究所)

廣海 啓太郎 名誉教授



廣海 啓太郎先生は、3月11日逝去された。享年78。

先生は、昭和25年京都大学理学部化学科を卒業、同25年9月から同28年7月まで同大学大学院（理学部）に在籍のち、大阪府立大学農学部助手、同講師、京都大学理学部助教授を経て、昭和45年農学部教授に就任、食品工学科酵素化学講座を担

当された。この間、昭和39年4月から40年7月まで、米国エール大学にて研究に従事された。平成元年停年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、平成元年4月から同9年3月まで福山大学工学部教授を務められた。

先生は、酵素化学、中でも酵素反応速度論に関する研究において優れた研究業績を残された。生体触媒としての酵素とその反応の分子論的理解に対して化学的な手法の重要性を強調された。とくに、定常

状態速度論的手法に加えて、迅速反応速度論の有用性にいち早く着目され、その理論的考察、装置の開発に努められ、アミラーゼやプロテアーゼ、酸化還元酵素、合成酵素などの構造と機能の解析に適用された。これらの研究を通して、酵素反応速度論的技法による酵素反応解析を確固なものとした。とりわけ、先生がアミラーゼ反応の解析に関して提出された「サブサイト理論」は、今日、糖質関連酵素の反応解析において普遍的に利用されている。先生は、これらの業績により酵素化学の発展に寄与されたのみならず、酵素反応速度論の手法の食品分析や臨床

分析への応用にも尽力され、タンパク質化学、分析化学、食品工学の分野においても多大の貢献をされた。

また、先生は、学術論文や専門書のほかに、酵素反応に関する多くの優れた教科書（例として、「酵素反応解析の実際」、「酵素反応」、「Kinetics of Fast Enzyme Reactions」など）を著され、今日でも不朽の名著として内外の酵素化学研究者の勉学に供されている。先生は、日本分析化学会副会長、日本生化学会常務理事、日本農芸化学会評議員などの要職を歴任され、これらの学会の発展にも貢献された。

（大学院農学研究科）

日誌 2005.2.1～2.28

2月7日 役員会	企画委員会
企画委員会	21日 役員会
8日 保健衛生委員会	22日 入学者選抜方法研究委員会
部局長会議	教育研究評議会
大学評価委員会	24日 企画委員会
14日 役員会	施設整備委員会
16日 国際交流会館委員会	25日 入学試験（前期）（27日まで）
国際交流委員会	28日 役員会
18日 図書館協議会	

公開講座

法学研究科21世紀COEプログラム連続市民公開講座

日時と会場： 5月14日（土） 12：30～15：30 ホテルグランヴィア京都5階「古今の間」

演 題： 第1回連続市民公開講座『法と政治における「人」』

講演者： 寺田 浩明 『《人治》と《法治》——伝統中国を素材にして』

中西 寛 『メディア時代の政治指導——日本とアメリカ』

参加費用： 無料・お飲物代として500円。

定 員： 先着100名

申込方法： 下記のHPの申込書をメールかFAX又は郵送でお送り下さい。

<http://lp21coe.law.kyoto-u.ac.jp/>

申込締切： 5月12日（木）

申込先： 〒606-8501京都市左京区吉田本町 京都大学大学院法学研究科COE事務局

E-mail：lp21coe@peach.ocn.ne.jp FAX：075-724-6173

お問合せは下記の担当まで：

lp21coe@peach.ocn.ne.jp（寺井）

お知らせ

総合博物館春季企画展―考古学を愉しむ!?―

一般公募の応募企画員の共同制作です。「考古学の方法」を展示しました。あなたも考古学者になって、その推理を支える証拠捜しに参加してください。考古資料は「過去のヒトが作って使ったモノ」です。そうしたヒトが付けた細かい痕跡を見逃さないあなたは、過去のヒトのジェスチャ―を見抜きます。想像をめぐらせる推理ではありません。過去の「犯罪」の捜査のように、証拠を積みあげていくパズルを解いて、考古学者の味わう楽しみをあなたも共有してください。

場 所：京都大学総合博物館 2 階企画展示室

期 間：4 月 6 日（水）～8 月 28 日（日） 開館時間：9：30～16：30（入館は16：00まで）

閉 館 日：毎週月、火曜日 入 館 料：一般400円、大・高校生300円、中・小学生200円

問合せ先：京都大学総合博物館事業掛

〒606-8501 京都市左京吉田本町 TEL 075-753-3272 FAX 075-753-3277

また、以下の様な公開講座や展示解説も行いますので、ぜひご参加ください。

詳しい応募方法などは博物館事業掛までお問合せください。

企画展関連行事

展示解説

毎週土曜日 13：30、14：30、15：30（毎回40分程度）

瓦資料観察教室

瓦に付いた造瓦道具の痕跡捜しをあなたと一緒にします。

開催日：7 月 23 日（土）、8 月 20 日（土）

開催時間：13：00～15：00

対象：高校生以上

定員：15名

造瓦教室（予定）

古代瓦の造瓦の実演を見学します。

生駒市山本瓦工業株式会社に出かけます。

7 月末から 8 月初のうちの 1 日を予定しています。教室に参加希望の方は、連休明けから、総合博物館入口の窓口で申込の受付を始めます。定員になり次第締め切ります。

対象：中学生以上

定員：20名

編集後記

成生委員長のもと、2年間にわたり広報委員会委員をつとめ、京大広報の編集に関わってきました。法人化の嵐のなかにあるような大学の様々な情報を伝えていくということの大変さはもちろんですが、同じ京大という屋根の下にいらながらも、大学の全体がどちらに向かって何を求めて動きつつあるのか―その胎動の音を「ゲラ原稿のチェック」という形で、いちはやく聴く機会を得られたことはとても興味深い経験でした。本号も密度の濃い原稿が勢揃いしています。紙幅の厳しい制約と原稿締め切りのなかで、玉稿をいただきました執筆者の方々に心より御礼申し上げます。（鈴木記）